

『清須越 — 清須から名古屋へ』

2014. 6. 28

清須市 加藤 富久

1. 東海最大の弥生環濠集落の存在 (S46 貝殻山貝塚、国史跡に→S50 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館設立 H24. 9 朝日遺跡よりの出土品 2, 028 点が国の重要文化財に指定)
2. 中世、鎌倉街道が西辺を通過 (源頼朝・足利義教通過)
3. 応仁の乱後 150 年程 尾張の中心として城下町化. その間、交通・経済・戦略的要衝として、守護斯波氏—守護代織田氏—織田信長の入城 (尾張統一 桶狭間の戦 徳川家康と同盟) — (織田信忠) — 織田信雄 (清須会議 小牧・長久手の戦、天正大地震、清須城の拡充) — 豊臣秀次 (叔父豊臣秀吉の実質直轄) — 福島正則 (秀吉の復心、三ツ蔵、関ヶ原の戦) — 松平忠吉 (家康 4 男、五条橋修築、1607 年没) — 徳川義直 (家康 9 男でまだその膝下にあり、大坂の役) といった錚々たる人物が清須城主に就任 「尾府」「清須府」
4. 清須越直前の清須城下
 - (イ) 文禄 3 (1594) 清須城下町調査で、町数 44、町家 2, 729 戸を持つ有数の町だった (『駒井日記』)
 - (ロ) 慶長 12 (1607) 清須通過の朝鮮通信使記録『海槎録』に、清須の繁栄ぶりを “天下の名城、「関東の巨鎮」と表現 忠吉附属の武家 1, 441 人 (『金府紀較』) 総人口 6・7 万と推定 (『清洲町史』)
 - (ハ) 城下町遺跡の発掘 (石垣基礎・金箔の鯨瓦・紋入瓦・鬼瓦・陶磁器・漆器・銭貨・柿経など出土品)
5. 清須越の経過 (当初、清須から見れば名古屋越)

1608 年 家康、尾張検地と御囲い堤命ず。山下氏勝の建議もあり、新城建設の沙汰 (『蓬左遷府記稿』)

1609 年 家康、義直を伴い駿府より清須城へ 名古屋築城と遷府を決定 普請奉行牧長勝ら五人と御大工棟梁中井正清・御大工頭岡部又右衛門を任命 名古屋城の地割・縄張り

1610 年 20 名の豊臣系外様大名の助役で堀・石垣造り (天下普請) 続いて天守作事へ堀川開削も始め、翌年夏には完成 清須土民社寺の移動開始

1611 年 早くも名古屋で新築家屋 150 余焼失 上洛の途次、家康・義直名古屋へ

1612 年 家康、巡見 本丸御殿築造開始。町割 天守・諸櫓ほぼ完成 “守りの城”

1613 年 諸士・町人の住居定まる 1614 年 大坂冬の陣 (義直、名古屋城より初陣) 秀忠も城内巡覧

1615 年 義直、春姫と名古屋城本丸御殿で結婚式 夏の陣で大坂豊臣氏滅亡 (元和偃武) 総曲輪は造らず

1616 年 家康死 (75 歳) 義直、母の相応院と共に駿府より名古屋城本丸に入り、翌年「御仕置始」
6. 清須越したもの
 - ① 城郭・書院・茶室・石垣・城門・蔵・屋敷・町屋・五条橋など ②社寺 4 社 130 寺近く (東寺町・南寺町)
 - ③ 土民あげて、町家は 2, 700 とも ④町名 67 とも、町人の住む碁盤割に

→これだけのものが、五条川・庄内川をこえて 7 キロも先の名古屋に、短期間に、どのようにして (費用、人手、川か陸か、舟か馬か) 移動したのか? 家康の意図は? 名古屋にとって清須こそがルーツであり、“清須越”であることは、大きな誇り・ステータス (家格) となる。大都市名古屋の原点
7. その後の清須 一旦は「思いがけない名古屋ができて、花の清須は野となろう」へ
 - (1) しかし、すぐに周辺からの新田開発 (「清須新田村」) や、美濃路の整備で再出発 (1614 年小田井の青物市・1616 年清須宿・1622 年枇杷島橋の設置) し、繁栄を取り戻す (清須花火・枇杷島山車)
 - (2) 尾張藩の天明の藩政改革で、1783 年所付代官の 1 つとして清須代官所 (陣屋) が置かれ、明治初年まで、中島・春日井・海東の 3 郡にわたる 184 ヶ村、総高 147, 454 石余を支配した。
 - (3) ただ、五条川・庄内川 (小田井人足) の洪水には悩まされ、治水事業の必要は常にあり (五条川の瀬替え、新川開削、入鹿切れ、東海豪雨)
 - (4) 明治以後も交通の要地あるいは都市近郊型農業地域 (県農事試験場・養鶏試験場) として、名古屋とのかかわりは深く (ベッドタウン化) 進んできた。S19、名古屋防空のため清洲飛行場建設。
 - (5) H17. 7. 7 清洲・新川・西枇杷島 3 町合併し清須市へ→H21. 10. 1 春日町も編入→H22 (2010) 清須越 400 年 →H24. 7. 7 市立図書館開館 →H26 (2014). 5. 1 現在 人口 66, 362 人、26, 928 世帯 面積 17. 32 km²

